



# 日野曳山の装飾

大阪府公文書館  
田母神 克幸

## はじめに

滋賀県蒲生郡日野町では、毎年五月二日から四日にかけて、「日野祭」と呼ばれる祭礼が執り行われます。

これは、日野町大字村井に鎮座する馬見岡綿向神社の祭礼で、同町大字上野田の雲雀野にある御旅所と本社とで実施されます。

祭りには、神子と芝田楽とを先頭に、神幣・神輿が渡御し、それに併せて各町内から16基の曳山が出され、神社に集結すると祭りの興奮度はいやがうえにも一気に高まります。

また、この祭りの最大の見所は、何と言つ

ても各町内より曳き出される16基の「曳山」の見事さでしょう。豪壮、華麗な山の姿、各部に施された彫刻デザインのディテールの素晴らしさ、日野商人の財力の豊かさを実感させる前幕や見送幕の豪華な染織品の数々、など動く美術館と言っても過言ではありません。今回は、特に「日野曳山」の装飾面について述べることとします。

## 立川流彫刻

日野の曳山は彫刻・鋳金具・染織品・絵画等の様々な装飾品によって彩られています。

彫刻には、彩色・素木彫の両者があります



日野祭（綿向神社）

（日野町教育委員会提供）

が、特に明記しておきたいのは、素木彫の方で、諏訪立川流彫刻師、立川和四郎の作と考えられる作品群が残されていることです。

立川流というのは、江戸時代中期に信州諏訪出身の初代立川和四郎富棟が、江戸の幕府御用彫刻大工であった立川小兵衛富房の下で彫刻の技術を修業し、後に立川姓を許され興した流派であります。富棟は、その後さらに江戸の中沢五兵衛の下でも修行を重ねて、彫刻師としての地位を築きあげて行きました。

彼の代表作品としては、諏訪神社秋宮御門屋・静岡浅間神社などがあります。

続いて、二代和四郎富昌、三代和四郎富重、四代和四郎富淳と続き、その作品は京の御所をはじめ、江戸、そして千葉（千葉神社）にまで残されており、足跡をたどることができます。

立川流の彫刻の特長は素木彫に見られます。これは白木の彫物で、素材である木材の木目を生かしながら作り上げられるものです。これらは、江戸初期まで行なわれていた西本願寺唐門や日光東照宮の彫刻のように彩色を施すことはしない白木彫ですので、幕府の度重なる奢侈禁止令にも抵触することがありませんでした。これらのことから立川流は、江戸時代後期には隆盛を極めたと考えることができます。

#### 日野曳山の彫刻

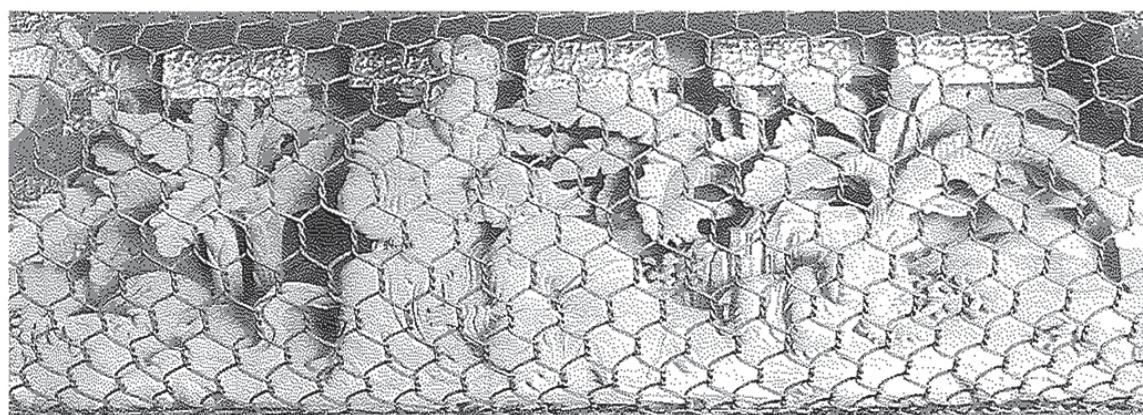
さて、日野曳山に残る彫刻を見ると、三台の曳山の彫刻に立川流の特長を見つけること

ができます。

まず清水町所蔵の曳山（六徳）です。同町の曳山は、宝永七年（1710）以前に製作されたと伝えられており、後に行われた文政時の大改造によって、現在の姿に増補されたということです。さてこの曳山の彫刻には、幕末当時人気の高かった「二十四孝」が題材として彫刻されています。階段に向かって正面右より、孟宗・董永・郭巨・王祥・剣子・楊香・姜詩・唐夫人・舜帝・黃香の十種類が彫刻されており、これらの作者は、立川家所蔵の下絵の袋に記す「天保八年四月 江州日野清水町二四孝絵模様入屋台」や、立川家の姻戚である北沢家（昌敬の子孫）所蔵の、清水町下絵の「同所（江州日野清水町）貳拾四孝之図拾枚入 立川常次控」などの史料と現存の同曳山の彫刻とが一致することから、立川流二代和四郎富昌と、娘婿の昌敬の作品と考えることができます。

次に南大窪町の曳山ですが、ここの曳山の彫刻は「唐獅子・人物」と「仙人尽くし」が特長であります。

曳山正面から見て左右に、母と童子・唐子と犬、階段裏には唐獅子と牡丹の彫刻がありまた右側面からは西王母・琴高仙人・蝦蟇仙人などの、俗に仙人尽くしとよばれる題材が彫られています。立川家に残る「南大久保屋台下図」に「盧敖仙人」「琴高仙人」などとあることから、立川流の作品であることは間違いないと考えられます。しかし作者の判別は



清水町曳山彫刻

(日野町教育委員会提供)



南大窪町曳山彫刻

(日野町教育委員会提供)

つかず、製作年代についても清水町の曳山と同じく天保年間ではなかろうかと考えられます。

続いて岡本町の曳山には、下場と呼ばれる部分の彫刻に立川流の様式が見てとれます。彫刻の題材は「十二支」ですが、作品はただたんに動物を彫るのみではなく、動物に立川流が得意とする仙人などの中国の伝説上の人々をからませたものをモチーフとして仕上げられており、品位の高さを感じ取ることができます。立川昌敬の子孫である北沢家には「江州日野岡本丁屋台彫」と書かれた下絵が現存していますのでこの彫刻は、立川家二代和四郎富昌が請け負った仕事の内から、立川昌敬の関与分ではなかったかと考えられます。

#### 日野曳山の染織品

日野曳山にはもう一つの装飾品として、前幕や見送幕などの染織品を挙げることができます。これは各町内によってさまざまな種類の染織品が見てとれます。なかには、中国貿

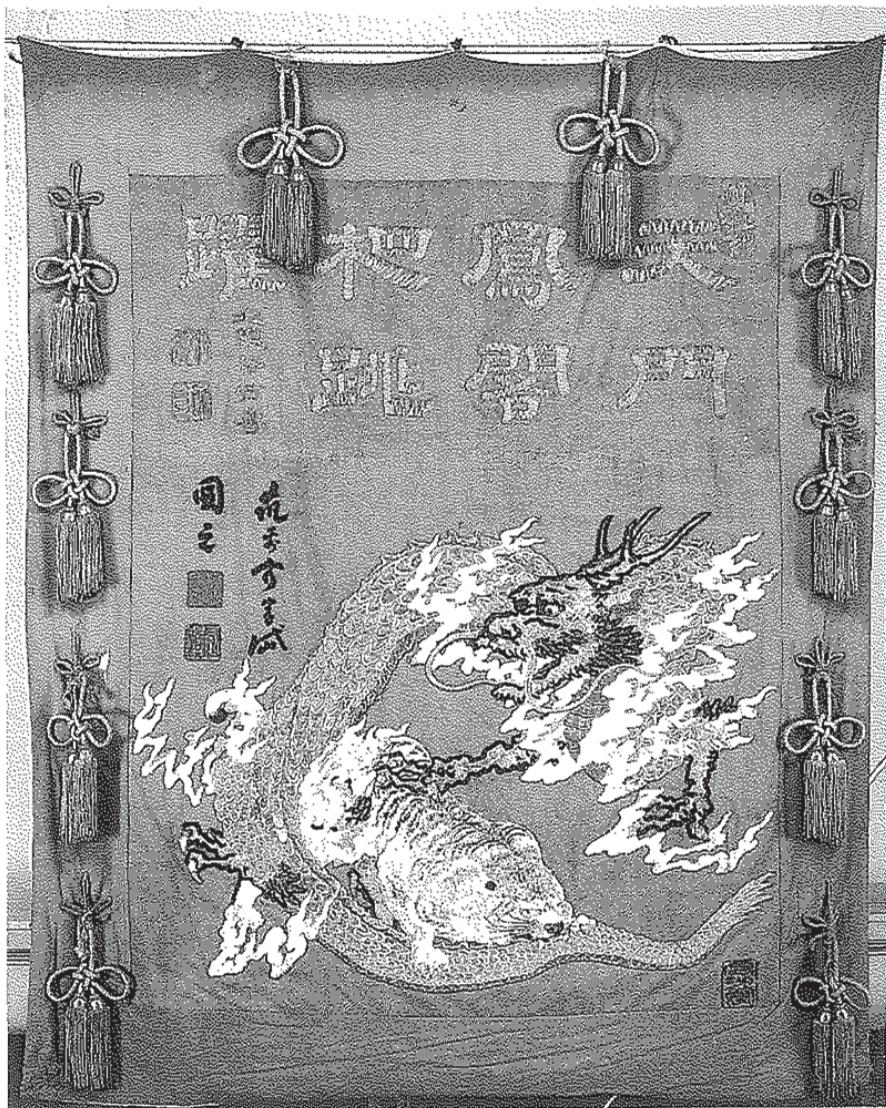
易とによって日本にもたらされた織物で、京都の祇園祭において山鉾の装飾に使用される染織品と酷似する品も残されており、当時の日野商人たちの財力の豊かさを、垣間見ることができます。

そしてもう一つ、日野曳山の幕には近世の京都画壇を代表する岸岱・岸慶父子、塩川文麟などの著名な画家がその下絵に筆を振るっていることも見逃せません。

それでは、日野曳山の染織品を見て行くことにしましょう。

まず、大窪町所蔵の曳山（龍虎車）に付属する見送幕ですが、これは岸岱(1782~1865)の下絵になる「龍虎図」です。

この幕は正式名称を「赤地龍虎図切り嵌め刺繡羅紗」と言い深紅の猩々糸の羅紗地の上に刺繡を施した布を下絵の通りに嵌め込んだもので、全体に金糸が多く使用されており、その糸も使用箇所毎に、金の色を変えて用いられているなど、手の込んだ細やかな技術を



大窪町曳山見送幕（日野町教育委員会提供）

見てとることができます。また虎の毛の部分などは刺繡の糸を上手に毛羽立たせてその霧囲気を見事に表現しています。外縁は黄茶無地羅紗を廻らせ、左右に四個づつ、上部に二個の計十個の飾房が付属します。

下絵の作者である岸岱は虎の名手であり、岸派という日本画の流派を打ち立てた、岸駒（1749～1838）の長男で、父の得意としていた龍虎の図柄を鋭く力強い筆致で描ききっています。過日、大窪町の佃満氏の御好意により下絵を拝見させて頂く機会を得ましたが、下絵は色鮮やかに伝来しており、その筆遣いは全体に豪壮華麗といえます。特に虎の毛の部分などは繊細に描かれており、まるでそこに毛皮があるのではないかと感じられるほど

であり、幕と比較して見ると、製作した職人もさぞ苦心したことでしょうが、下絵同様の見事な仕上がりに職人の技を窺い見ることができます。また龍の鱗なども、その細部に至るまでくまでも力強くまた気高く描かれており、たとえ下絵といえども手を抜かない、筆者の並々ならぬ筆遣いが感じられます。なおこの作品は、箱書きから文政十二年（1830）岸岱50歳の作であることがわかり、彼の画技が冴え渡っていた頃の作品であると考えることができます。それゆえに、このような迫力の画面を描くことができたのでしょう。

また、同町には岸岱の長男である岸慶（1811～1848）の下絵による横幕「赤地舞楽切り嵌め刺繡羅紗」も残されています。この幕は、曳山の左右側面に掛けて使用されるた

め、二枚一組になっており、曳山正面に向かって左側には舞楽の納蘇利、右側には同じく蘭陵王の図が描かれています。形状は見送幕と同様に、深紅の羅紗地の上にそれぞれの舞楽の姿と幔幕、火焰太鼓などの刺繡が嵌め込まれています。刺繡は「龍虎図」と同じく金糸が多く使用されており、見所としては蘭陵王図にある火焰太鼓の刺繡が挙げられます。太鼓の縁を飾る龍や瑞雲、宝珠などや太鼓に描かれた三つ巴紋様などの細部に至るまで細かに施された刺繡の技は見事なもので、また外縁には薄黄地渦巻文様ビロードが廻らされています。

この下絵も幕とともに伝来しております。これは筆者の岸慶が、19歳の時の作品であり

先述の父、岸岱の絵と比較するといささか迫力に欠けることは否めません。しかし迫力に欠ける所はあっても、舞楽の衣裳紋様や面舞台装置の装飾部分などの緻密な描写には、筆者の若々しい、真摯な姿が感じられます。

このように、大窪町の見送幕と横幕は、岸父子の共同作品という、他に類を見ない装飾品群となっています。

次で、越川町には横幕「赤地雲鶴文様繡ビロード」が所蔵されています。幕は左右二枚あり、赤のビロード地に、右方の幕には鶴三羽、左方の幕には鶴四羽が雲間に飛び交う姿が繡いとられています。雲は金糸で繡いとられ、全体に上品な調和を作り上げています。

この幕の下絵は、幕末期の名画家であった塩川文麟（1808～1877）の筆になるものです。文麟は絵を四条派に学び、京都御所の障壁画なども手がけています。晩年の一時期には、日野に滞在しておりましたので、同町の下絵はこの滞在時期に描かれたものと考えられます。『山中家二号文書』には「今般御當所<sup>江</sup> 京師塩川文麟先生御越<sup>ニ</sup>付諸旦那様方御成助<sup>ニ</sup>掛物講相企申候（以下略）」とあり、文麟の日

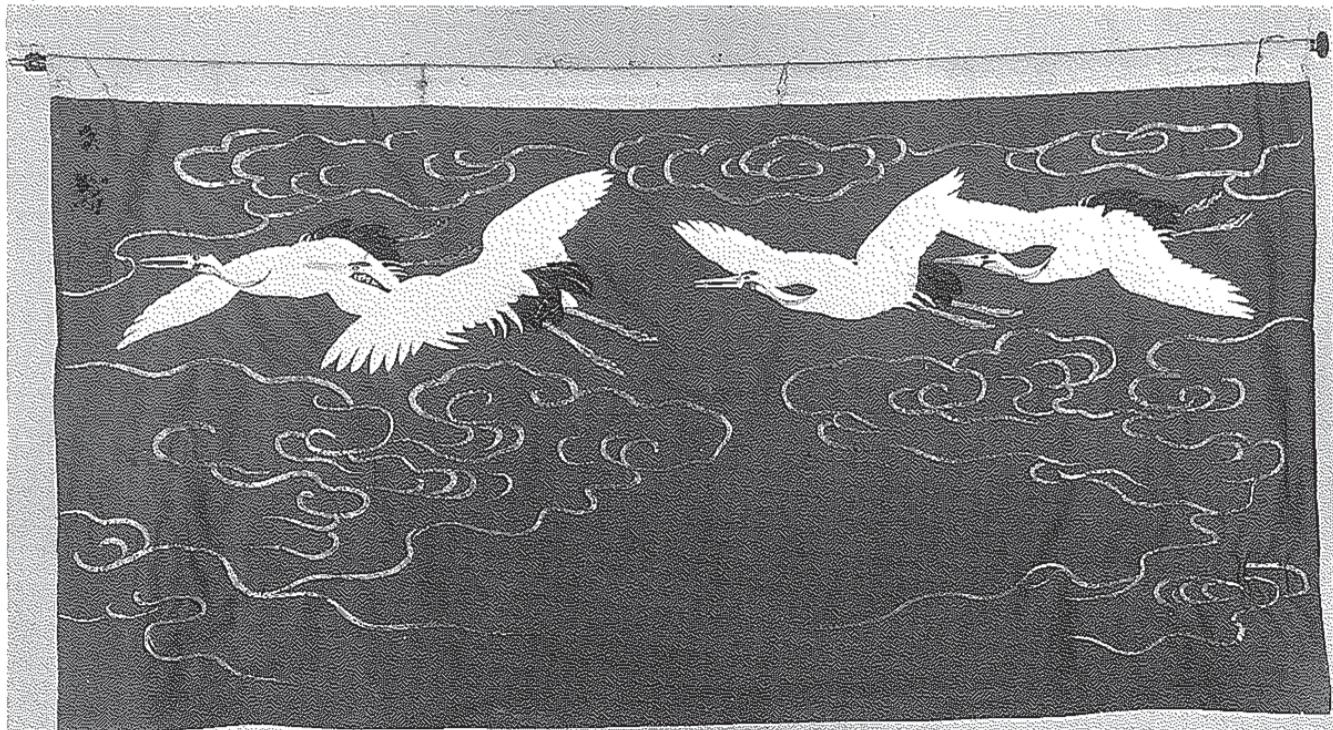
野滞在が確認できます。

この他に、金英町には見送幕「薄茶地古事記説話図切り嵌め刺繡、繡綴織」が所蔵されています。製作年は明治十八年（1885）で、明治期の文人・南画の画家富岡鐵斎（1836～1924）が贊を寄せています。

鐵斎は、蒲生町在住の画家、野口氏と交際があったようで、近江八幡などを度々訪れていたことから、金英町所蔵見送幕の贊を揮毫する機会があったものと考えられます。なお署名の部分に「百鍊」とあるのは、鐵斎の名であります。

同町には他にも左右の横幕「茶地雲龍吉祥文様綴織」があります。これは、中国清時代の綴れ織りで、四爪の龍が正面に向いている図柄であります。この幕とよく似た品は、京都祇園祭で山鉾を彩る飾幕の中に見付け出すことができます。

これらの織物は、この頃の中国貿易によって日本にもたらされたものであり、限られた富裕階級の者たちにしか入手できませんでした。これらのことから考えても、当時の日野商人たちは、それを購入し、山鉾の装飾に使



越川町曳山横幕

（日野町教育委員会提供）

用した京都の室町、新町あたりの町衆たちと比較しても勝るとも劣らない財力を築き上げていたことがよくわかります。

また、日野曳山にはもう一つ、一風変わった織物が装飾幕として使用されています。それは「蝦夷錦」と呼ばれる、紺地・花色地・赤地などに、金糸・銀糸と染糸とで雲龍の文様を織り出した錦です。これらは中国産の織物ですが、中国東北部や、サハリン、蝦夷を経由して日本に渡ってきた品であったので、このような名で呼ばれています。

日野曳山では、新町所蔵見送幕残欠「紺地雲龍文蝦夷錦」や、上鍛冶町所蔵右横幕「紺雲文地龍海賊文様錦」にそれを見ることがあります。

#### まとめとして

日野町は、近世期初頭に蒲生氏郷の城下町からはじまり、近江日野商人の才覚によって繁栄を築きあげた町です。

また日野は、様々な技術職集団が存在した町でもありました。城下町ということから、神社仏閣が多数存在していますので、それに関わる大工の技術が発展し、その高度な技術は、御所の修理に携わるまでになっていました。また国友の鉄砲と並び称される日野鉄砲の一大産地であったことから彫金技術が発展し、さらに「日野椀」に代表されるように、漆器の量産地でもありました。

このように、大工・鍛冶師・塗師・彫金師などの技術集団が存在したことが、後の曳山造りに生かされていったのではないかと考えられます。

また、全国規模の販売網を持つ日野の豪商たちの存在は、曳山を維持管理、発展させて行く上において、重要な役割を担っていました。彼らが文化芸術を愛好し、またその財力を惜し気もなく曳山に注ぎ込んだことによって、これまで述べてきた信州の彫刻や、京都の絵師による幕の下絵などの一級作品を得ることができたのです。

これらのことから、日野曳山の装飾品は、豊かな経済力をバックとして町衆文化の粋を集めたものであり、それは今日まで地元の人々の並々ならぬ努力で、保存されてきたと言えましょう。

#### 【参考文献】

- ・日野町教育委員会編 『日野曳山調査報告書』平成2年
- ・日野祭調査委員会編 『日野祭』日野町教育委員会発行 昭和52年
- ・栗東町歴史民俗博物館編 『企画展 岸派とその系譜—岸駒から岸竹堂へ—』 平成8年
- ・日永伊久男 「日野曳山」(財団法人 滋賀県文化財保護協会編 『近江の文化財教室』平成7年)

滋賀文化財教室シリーズ No.166号

発行年月日 1997年1月20日  
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
〒520-21 大津市瀬田南大萱町1732-2  
TEL(0775)48-9780 FAX(0775)43-1525